

# 清田事務局長辞任について

塩 月 佐 一

(会員・佐伯市匠南)

昭和五十四年十一月、病氣療養中の羽柴先生は、『本匠村史』編さんに全力を注ぐために、創立以来満二十二年間、一手に遂行されていた佐伯史談会の業務を、事務局・編集部・経理部に三分され、事務局長清田義雄・編集部主任塩月佐一・経理部主任岩城京の三人に引き継がれました。

清田事務局長は今日まで満六年間、名事務局長の評判の高い方で、会員の信頼を一身に受けて佐伯史談会の運営に当ってこられました。本年五月病気が発見され、療養のため辞任を申し出られました。以来高木会長の手により後任の選考が進められて来ましたが、白羽の矢を立てられた人々はみな辞退し、後任が決まらないまゝ長い間先生には大変ご迷惑をおかけして今日に至りました。この状況を知り、見るに見かねた軸丸勇評議員は、早

速富沢泰評議員とはかり、後任選考の行動を起こされました。

「このまゝでは清田先生に相すまない。先生のご気性だから後任が決まらなければ安心して療養もできないだろう。一日も早く後任を決めなければ――。」と早速選考会開催を筆者に催促して来ました。筆者は清田先生にお願いして選考会を開いて頂きました。

去る一月五日、これ以上延ばされぬ。どうしてもこの会で決めなければと第二回の選考会を開きました。協議を重ねた結果、事務局長に塩月佐一を、編集長の後任には後藤知久氏を内定し、後藤氏の承諾を得た後、一月十一日高木会長が依頼のために訪問し、難行に難行を重ねた後任問題は漸く解決をみました。

清田前事務局長は、福岡教育大学名誉教授で本年八十一才のご高齢にもかかわらず、誰よりも謙虚に、誰よりも親切に、率先垂範して事にあたり、ときばきと会務を処理なされ、かゆい所に手の届くようにお世話して下さいました。しかし病気は如何とも致し難く、後進に道を譲られたのでした。

また、清田先生はすばらしい拓本技術も持っておられ、毎月の日本拓本協会九州支部の採拓会には、必ず参加なされ、拓本数は膨大なものになっています。

かねてから拓本をはじめ、整理しなければならぬものが多いので、事務局長をやめたいと言っておられましたし、私達も早くやめていただくのが先生のためだとは思っていましたが、名事務局長のあとを継ぐ者がなく、今日に至ったのでした。この度療養のためやめられましたが、実はもっと早くやめていただくべきだったので、不肖の後輩ばかりで先生には大変ご迷惑をおかけし、申し訳なく思っています。今は一日も早く健康をご回復されますようお願い致します。

やむを得ず不肖私があとをお引受けすることになりま

したが、清田先生のような事務局長になれるわけはなし、会員の皆様にいろいろご迷惑をおかけする事が多いと思えますが、よろしく御指導下さいますようお願い致します。

『佐伯史談』の編集については、羽柴先生の名を傷つけないよう、私なりに努力して来ましたが、もって生まれた愚鈍は如何ともしがたく、悪い所ばかりが目立ち会員の皆さん・寄稿者の皆さんに大変ご迷惑をおかけ致しましたが、御容赦をお願い致します。

後任の編集主任の後藤知久先生は、編集には造けいの深い方です。先生は市役所時代は市報編集長として評判の高かった方です。必ず会員の皆さんにご満足いただける立派な『佐伯史談』が生まれることと存じます。

終りに編集について気になることを、会員の皆さんにお願い致します。この頃投稿なさる方々が少くなりました。会員の皆さん、お気軽に投稿して下さい。『佐伯史談』は会員の皆さんの機関誌です。決して堅苦しい雑誌ではないのですから。